柔　道　連　盟

沿　　革

現在の柔道はすべて故嘉納治五郎師範によって創始された講道館柔道である。嘉納師範は古くから伝えられた柔術各派の長所を集めスポーツとして向上させた。嘉納師範は学習院教頭や東京高等師範（現、東京教育大学）学校長を勤めた。又、東洋ではじめてＩＯＣ委員（国際オリンピック委員）となり、さらに明治４４年大日本体育協会を創立、初代会長に就任した。柔道だけでなくわが国の教育界、スポーツ界を世界に発展させた大恩人。

講道館の創立は明治１５年（1882年）で、年ごとに隆盛したが、その普及に一番大きな影響を与えたのは学校体育に取り入れられたことだ。明治４４年（1911年）、文部省は中等学校の男子体育教材に柔道を加えた。必修と決ったのは昭和６年だが道内の中等学校では大正時代から事実上、必修のようなものだった。

この柔道、幕別町においては、大正６年３月に札幌師範学校を卒業された、故新田達道氏が幕別尋常高等小学校で、初めて柔道を児童・生徒に教えられた記録がある。又、戦前は、現、柔道連盟会長の山田栄氏が、出身地の糠内において、自ら修業しながら地元の青年たちに指導して普及にあたった。戦後は、途別において坂上俊夫氏がいて、当時、60～70人の青年達が柔道の指導を受けた。　その中には、のちの柔道連盟理事長、安部政夫氏がいた。安部はその後、柔道修行を続け数多くの試合にも出場した。又、安部は十勝柔道同好会（現、十勝柔道連盟）幕別支部長を務めた。そして昭和４４年に安部政夫氏をはじめ、数名の有志が集まり柔道連盟を結成した。しかし当時はそれほどの活動はなく、連盟として正常運営されたのが昭和46～47年頃と記録では印されている。そのような中で町内大会などを企画して各行事が開催されたが、それよりも先に指導者や選手の確保と養成が急務だった。会員を募集しても、最初はかなりの会員が入門して来たが実際に永続きする選手は、わずかにすぎなかった。残って修業に励んでいる選手達で全十勝大会にも出場した事もあったが、当時は初戦で破れて帰る事が何回もあった。時に、柔道連盟副会長の小林繁郎氏４段（現、帯広錬成館塾長）は糠内中学校校長であった。小林は、戦前の山田につぎ、糠内において柔道を普及させ、精神修業に重点を置き、柔道本来の息吹きを与えたのが小林であった。山田　栄、小林繁郎、安部政夫は、柔道連盟の基礎づくりをした大恩人である。このような体制の中で、当時、十勝柔道連盟の道場（十勝体育館）で修業中の金野忠選手（20才）を迎えた。金野は、幕別町出身で幕中から東京教育学院の普通科を修了し後に幕別町役場へ奉職した努力家である。身長は約161センチで体重が６０キロを割る軽量級の選手。また当時の一般選手として折笠政弘、牧野通幸がいた。のちに

山田　栄

安部政夫

小林繁郎

彼らは数多くの試合にも出場した。昭和４８年３月には、全道柔道選手権大会十勝地区予選が帯広市総合体育館で開かれ、軽量の金野初段が（初、２段の部、無差別の大会）で準々決勝まで出場した記録が残されている。又、折笠初段は重量級の選手で、昭和４９年の全十勝青年柔道大会の重量級で準優勝した記録が残されている。全幕別柔道選手権大会も、昭和４５年よりはじまり以後、回を重ねる事に盛大で中味の充実した大会が開かれている。特に昭和４８年度の第３回大会より、「新田達道」杯が金剛寺の新田彰生氏より設けられた。又、北海道新聞社、北海タイムス社、十勝毎日新聞社などの各報道機関の後援もあり今や幕別において最も伝統のある大会に成長していった。一般選手が無差別級で出場できたのは、昭和４９年頃まででで、以後、高校生が一般選手と替わり出場してきた。特に第３回全幕別選手権大会は無差別級の決勝戦で、折笠初段と金野初段の好試合が展開された。折笠は得意の跳腰と払腰で、金野は、背負投げ、体落し大内刈の得意技で攻防されたが体重にまさる折笠が金野を破り初優勝した。準優勝の金野も軽量ながら終始健闘した。また本選手権で２年連続優勝を果した選手もいる。昭和４８、４９年の中学生の部で平井正人、５１、５２年の（同）三井英治の２名。また昭和５０年の大会では同時に２種目のタイトルを手中にした桃本敏文が、中学生の部と無差別級を制した記録がある。

昭和48年度選手権大会の決勝戦
金野選手（左）と折笠選手

柔道には、捻挫や打ち身がつきものだが、金野は練習中、右膝を捻挫して一時現役から遠ざかり指導の方へ回って、若手選手の育成に傾注した。指導者はただ選手として強ければ良いというものではない。指導者は指導者としてこれもまた、研究しなければならないのである。当時、金野は２１才の若さであった（のちに金野は数多くの名選手を育てた）。金野はまず、小中学生のレベルアップを早急に行なわなければならないという考えで、外部との積極的な交流に乗り出した。手はじめに利別柔道少年団（現、池田柔道少年団）団長の筒井英哉氏と交友の関係にあり筒井氏と相談した結果、幕別対抗利別の交流試合を企画した。この大会も成功し、やがて回を重ねていくうちに両氏は、この大会の輪をさらに広めていこうと、交流試合に始まったこの大会はついに東部十勝少年柔道大会と一大発展をしていったのである。昭和４７年に全道少年団柔道大会十勝地区予選が帯広市白樺高校体育館で開かれ、幕別は、初出場で第３位に入賞した。次に金野は強化の一環として帯広にある錬成館道場（小林繁郎氏が校長を退職され、帯広で道場を開いた）少年団との練習試合も計画した。

金野　忠

又、金野は、当時、全日本学生柔道チャンピオンの上村春樹選手四段（明治大学４年）に指導についてのアドバイスを受けるために手紙を書いたのがきっかけで交友関係を持った。その指導体制も益々本格化し、指導内容も、ぐんぐん強化された。上村選手は昭和４８年に旭化成延岡支社に入社し、はじめて全日本選手権大会で優勝したその年、金野を頼って初来町（初来道）したのである。上村選手は３日間滞在し、幕別の青少年柔道家と交流をもち、又、中島国男町長と会談するなど、歴史的な記録がつくられた。当時の新聞各社は、上村選手の来町の記事を一斉に報じた。のちに上村選手は、昭和５０年に２

第５回東部十勝少年柔道大会は
幕別町青少年会館で開かれた。

度目の全日本選手権大会に優勝した。その上村選手が、昭和５１年第２１回オリンピックモントリオール大会無差別級の選手として派遣され、日本の期待を背負った。もちろん親友の金野も全試合を見守っていた。東京、ミュンヘンとまだ日本選手が一度も手にした事がなかった無差別級であったが、上村選手は決勝でイギリスのレムフリー選手を上四方固めで破り見事、金メダルを手にした。その金メダルを土産に上村選手は、金野に会うため８月２６日に２度目の来町になった。そして青少年会館で柔道教室を開き、十勝管内から多勢の関係者や小・中・高生の選手が集まり、盛大に歓迎式や柔道教室が取り行なわれた。この時も、各新聞社、ＮＨＫニュースなどで一斉に報じられ、まだオリンピックムードがただよう状態の中であるため、十勝はもちろん全道的に全幕別は知られるようになった。当時、上村選手は、４日間滞在し、金野事務局長宅に宿泊した。さらに上村選手は、昭和５３年８月３０～３１日に３度目の来町となった。この時は、実業団日本一の旭化成柔道部の主将として本道遠征の最中に２日間、滞在した。３度目とあって、地理にも慣れた様子であった。柔道連盟の山田会長、大石町長、貝森副会長、安部理事長、佐々木副理事長、金野事務局長、道下理事など関係者との親睦会も行なわれ、国内、国際柔道の現状などについて話し合いがもたれた。

昭和48年 上村選手来町で中島町長と対面、金野（左） 上村選手（中央） 町長（右）

次に金野は、札幌にある高校柔道最強の東海大学第四高等学校との交流も行なった。そして着々とその成果があらわれてきたのである。このような中で昭和４９年６月１６日には第５回全道少年団柔道大会十勝地区予選では、強化された選手が出場した結果、中学生団体が準優勝の成績を収めた。いきおいに乗った幕別は２週間後に開かれた第４回全道中学校柔道大会十勝地区予選では、見事に初優勝をとげて、念願の全道大会へのキップを手にした。この時の選手は、３年　平井正人、宮垣正秀、２年　岡　誠二、桃本敏之、三井政浩、三井俊市という過去最強のメンバーであった。試合成績は、１回戦音更、２回戦広尾Ａ、そして準決勝は浦幌を破り、決勝は、第５回全道少年団大会で優勝した芽室との対戦だったが、その芽室を畳に沈め、幕別はわずか３年目に十勝を制したのである。当初、金野指導部長は、４年計画で全道大会をねらっていたが、１年早く全道出場出来た事は、各選手の努力と根性の賜であろうと、のちに金野は話していた。そして８月４日は、旭川の夏祭であり、旭川市立北都中学校体育館で全国予選を兼ねた第４回全道中学校柔道大会が開かれた。幕別は、十勝大会で優勝したメンバーをそのまま編成した。全道１４支庁から、それぞれの優勝チームが出場し、暑さの中熱戦が展開された。幕別は予選リーグのＤブロックで出場し１回戦は、日高管内代表の荻伏中学校を３対１で破り予選リーグ

オリンピックで優勝し、金野氏と再会した上村春樹５段

柔道教室の会場で大石町長と握手をする上村選手

2回戦に胆振管内代表の室蘭、蘭東中学校と対戦したがおしくも2対2の内容差で破れ決勝トーナメントをのがした。しかし幕別は学年によるハンデイを克服してりっぱな試合を見せてくれた。その年の11月3日（文化の日）に柔道連盟中学生団体は、その努力と功績を讃えられ、町スポーツ奨励賞を受賞したのである。昭和50年に入り、幕別は皮切りに5月に開かれた第6回全道少年団柔道大会十勝地区予選で団体3位となり個人では、岡　誠二が3位に入賞、そして6月には第5回全道中学校柔道大会十勝地区予選がはじめて幕別で開かれた。そして昨年に引き続き2連勝をねらったが地元の応援に答える事ができず、3位の結果に終わってしまった。選手編成のミスであった。しかし個人戦では岡　誠二が準優勝の成績を残したのである。

全道大会へ出場し町スポーツ奨励賞を受賞した中学生チーム

さて、強化策を打ち出した金野は、指導研究部長として昭和50年8月14日から1週間、柔道連盟としては、初めての国内遠征に出発した。遠征先は宮崎県延岡市、旭化成柔道部であった。旭化成は上村選手の所属しているチームで、第1線級の選手がそろっている。上村選手の宿泊している、旭化成第1恒安寮に着いた金野は、早速、研究のための練習に参加して、各選手と顔を合わせた。中には、全日本重量級8位の佐々木均5段など、実業団日本一のトレーニングと練習は、これまた、すごいのである。初遠征で1週間の練習を無事消化して空路帰町した金野にとっては、収穫の多い貴重な体験であった。続いて金野は、昭和52年5月に2回目の遠征をし、空路、宮崎へと飛び立った。今回の遠征は、強化合宿と、上村選手の結婚式に出席するためで、この結婚式には、北海道から金野ただ1人であり、当日、会場には、柔道界や政界、経済界から多くの名士が出席していた。会場は宮崎サンホテルフェニックス、国際会議場であった。さらに金野は、昭和54年2月に3回目の遠征を志した。この遠征には、指導部の道下道夫3段も一緒に出発した。道下は、初めての九州遠征で、柔道熱心な人柄であり温厚な人物である。道下は、警察官で巡査部長の職にあり、昭和51年8月に帯広警察署幕別派出所に転任してきた。道下3段は道警察学校時代に2段になり、機動隊で練習に励んだ事がある。国内遠征の成果は、連盟はもとより、各選手達の強化に大きな影響を与えると共に、柔道連盟の発展とつながって行ったのである。

道下道夫

さて、昭和50年9月に第19回全十勝少年柔道大会が帯広市総合体育館で開かれた。6月の大会で2連勝を果せなかったくやしさを、金野はこの大会にぶっつけた。選手編成も慎重に行ない過去の試合成績も参考にし3日間でベスト編成した。そう言った祈願が実ってか見事に優勝を果す事ができた。大会名こそ違うが、2年連続優勝し、十勝一の力を示した。選手は、岡　誠二、桧本敏文、三井政浩、三井俊市、高橋昭浩の5名で、めざましい活躍をした。平井正人、宮垣正秀も含め少年柔道の黄金時代を築いたのであった。昭和50年3月に平井は、北海高校へ、そして宮垣は地元に残り帯広三条高校へ進学、翌、昭和51年には、岡、桧本、三井政浩が東海大学第四高校へ、三井俊市は帯広農業高校へとそれぞれ進学した。特に桧本は、中学校卒業前に初段をとり黒帯をおみやげに東海大四へ進学した。当時、柔道連盟は、2回目の町スポーツ奨励賞を受賞した。さて高校へ進学した彼らは、抜群の強さを誇り、在学中、すばらしい実績を残した。まず平井は、進学した年、札幌地区大会の新人戦の中量

級で早くも優勝した。そして２年生で全道高等学校柔道大会の中量級で優勝、インターハイへ出場。３年になると１年後輩の、岡、桃本がぐんぐん強くなってきて、全道高校柔道大会の中量級の準決勝では、平井と桃本が当るなど幕別勢が大活躍、結局平井は３年の時、全道高校柔道大会の中量級で準優勝、２年の桃本が第３位の成績を収めた。次に平井は、第９回全日本新人体重別選手権大会北海道予選の７１Kg以下級で準優勝、国体北海道予選でも準優勝した。次に東海大学第四高校へ進学した桃本は昭和５３年８月に夕張市で開かれた第３３回国民体育大会北海道予選において７１Kg以下級で準優勝、この大会には金野指導部長も観戦し、岡、桃本の試合を見守っていた。そして、１１月には第１０回全日本新人体重別選手権大会北海道予選の６５Kg以下級で見事に桃本が優勝、岡が７８Kg以下級で優勝した。このニュース、北海道新聞などで「幕別っ子、全日本大会へ」と一大記事として、岡、桃本の写真入りで報道された。そして１２月には２人とも講道館で開かれる第１０回全日本新人体重別選手権大会へ出場した。その結果桃本は、１回戦勝ち進み、準々決勝まで進出し、６５Kg以下級のジュニアで全日本のベスト８に入った。一方、岡は、おしくも１回戦で判定負けをしたが、２人とも思いきった素晴らしい試合を見せた。そのほか２人は在学中、インターハイや金鷲旗全国高校大会などその実績は見事だった。

平井正人

桃本敏文

岡　誠二

昭和５３年３月に北海高校を卒業した平井はすぐ上京し総合警備保障に就職した。そして５月には東京都港区柔道大会の２段の部で優勝し幕別っ子の意地を見せた。

一方、翌５４年に卒業した岡、桃本は北海道警察に奉職、三井政浩は仙台にある東北柔道専門学校へ進学し、整骨師を志す事になった。又、三井俊市は、千葉県警にそれぞれ進み将来を期待される青年として活躍している。ほかに警察官として進んだのは、宮垣利文、宮垣正秀兄弟が警視庁で活躍している。

さて幕別には数多くの選手が来町し青少年会館の青畳に汗を残していったが、昭和５３年６月には札幌より東海大学第四高校柔道部一行が訪ずれた。監督の佐藤宜紘６段、水落満雄５段、そして石川隆夫４段と各選手で幕別の青少年柔道家と交流を図った。又、翌年の８月には東京より市島道場一行が来町し、都会っ子と道産子少年団との交流が開かれた。このように先輩達の記録に負けじと、後輩の少年達も精進努力した。昭和５０年１２月には全幕別柔道少年団札内分団が結成され、札内地区においても団員を募り練習を開始した。指導員には金野指導部長と過去に全国青年大会に出場した事のある佐々木房男４段。それと飯沢常造氏であった。そして金野指導部長の提唱で「指導研究部会」を設置し、指導にあたっての技術面、精神面で研究に努めた。その指導の成果もめきめきあらわれて常に十勝大会では先輩達の実績を維持し、上位を保っていた。特に昭和５２年１０月に釧路で開かれた第７回東北海道少年団大会では、４ブロックの３チームで予選が行なわれ、全幕別は予選リ

来町した東海大学第四高校柔道部

ーグの１回戦、標茶Ａを４対１で破り、２回戦は根室Ｂを５対０の完勝で決勝トーナメントへ進出した。準決勝は強敵、吉沢正伸氏がひきいる根室Ａである。この試合は２対２の引き分けのまま代表戦に持ち込み、代表戦は２回まで行なったがこれも引き分けで終わり結局、抽選勝ちで決勝へ進出した。決勝は同じ十勝代表の中札内であった。これを２対２の引き分けだったが、ポイントの内容差でおしくも優勝できなかったが、準優勝という立派な実績を残した。この大会の出場選手は、高橋弘泰、吉田茂利、長内　繁、林　盛裕（小６年）と長内　保（小５年）の５名。尚、本大会には中学生の団体も出場したが予選リーグで敗退した。

佐々木 勇 男

さて、過去素晴しい実績を残し天下にその名声を残した全幕別は今や十勝の中堅団体として活動している。その源は、もちろん指導陣や柔道連盟役員達である。昭和４７年に柔道連盟理事として就任した貝森拓司氏は、持ち前の手腕を発揮し、常に金野事務局長と事業計画や会議などで活躍した。のちに、貝森氏は常任理事、そして昭和５１年より副会長に就任し、山田栄会長の右腕として現在も活躍している。貝森氏は、帯広農業高校在学中に柔道を志した事もあり、柔道はもちろんスポーツに対する認識も深く、連盟役員の信望も厚く、その実行力は定評がある。また、過去に在任していた夏井輝之氏の功績も忘れてはならない。

今、全幕別柔道連盟は、十勝柔道連盟の中堅支部としての役割も大であり、柔道界発展につながる団体としてその責務も大きいのである。目まぐるしく動いている国際柔道連盟や、国内、道内の柔道界の中で、全幕別柔道連盟は昭和５５年１０月に創立１０周年を迎える。柔道連盟を巣立ちした各選手も全国各地でその精神や柔道を普及し後世に又、永遠にその歴史を残してゆくだろう。

貝森拓司

各団体別 全国、全道大会出場関係記録

団体名　全幕別柔道連盟

時	大会名	開催地	団体（個人）名	大会出場記録	参考
昭和49年	第4回全道中学校柔道大会	旭川市	幕別中学校チーム	予選リーグ1勝1敗	宮垣正秀．平井正人．岡　誠二．桃本敏文．三井政浩．三井俊市
昭和51年	第26回全道高等学校柔道大会	長野市	平井正人（中量級）		全道大会優勝（北海高校2年）
	第6回東北海道柔道少年団柔道大会	釧路市	全幕別柔道少年団	予選リーグ1勝1敗（小学生の部）	長内　繁．高橋弘泰．貝森耕司．木藤尚人．長内　保
昭和52年	第7回東北海道柔道少年団柔道大会	釧路市	全幕別柔道少年団	団体　準優勝（小学生の部）	長内　繁．高橋弘泰．吉田茂利．林　盛裕．長内　保
昭和53年	第28回全道高等学校柔道大会	帯広市	岡　誠二（軽重量級）	第3位	東海大学第四高校　3年
	第33回国民体育大会北海道予選	夕張市	桃本敏文（71Kg級）	準優勝	〃
	第10回全日本新人体重別柔道選手権大会北海道予選	札幌市	桃本敏文（65Kg級） 岡　誠二（78Kg級）	優勝 優勝	〃 〃
	第10回全日本新人体重別柔道選手権大会	東京都	桃本敏文（65Kg級）	準々決勝進出	〃
昭和54年	第9回東北海道柔道少年団柔道大会）	釧路市	全幕別柔道少年団	敢闘賞（中学生の部）	長内　繁．高橋弘泰．吉田茂利．林　盛裕．長内　保
	第11回全日本新人体重別柔道選手権大会	東京都	桃本敏文（65Kg級）		（全道大会2年連続優勝）